

はぎ おお やまぐるま

萩大山車編

祭りばやしを聞いてみる

四月になると各地区で春祭りが開かれ、威勢のいい祭りばやしやしが聞こえてきます。今回からシリーズで町指定文化財五台の山車にスポットを当て、祭りにかける取り組みや意気込みについて紹介します。

「坂下ろし直前の心臓の『バクバク』感を楽しんでます」と身振り手振りを交えて、祭りの話に夢中になるのは萩大山車保存会の青木賢治さん。

萩の祭礼は毎年四月の第二土曜日と日曜日に行われる。「おくるま」と呼ぶ萩大山車は、明治四十四年に竣工式を挙げた記録が残る。施された彫刻のほとんどが彫常一門の作。前山の懸魚と呼ばれる部分に取り



坂下ろしの一場面(写真提供 藤野道子さん)

付けられた「龍」は、初代彫常「秀逸の作品。懸魚をさほどいたみのない「松に天狗」から「龍」の彫刻に替えたのは「おくるま」をより立派なものにしたいという萩地区の熱意の表れ。今にも飛び出してきそうな迫力ある「龍」を山車保存会のメンバーは誇らしげに自慢する。

囃子の音が勢いを増す。引き手と観衆の緊張感がみなぎる。「いくぞ」。後見が赤法被に目で合図を送る。

その瞬間、赤法被の持つ拍子木から「カチカチカチ」と音が奏でられ、山車は動き出す。祭りが最高潮を迎える、坂下ろしの一場面。

大山祇神社境内から急な坂道を勢いよく曳き下ろす。桜が舞い散り、砂煙が上がる。動きを止めずに楫(か)を取り、山車を九十度回転させ、そのまま一気に細い道を直進していく。「おくるま」の勇壮な姿は見る者



前山の懸魚の「龍」。昭和25年初代彫常作。(写真提供 青木賢治さん)

も魅了する。「バクバク感の後は、うれしさと感動で鳥肌が立ちます。この感じがたまらないんです」

二〇〇五年開催の愛知万博イベント「あいち山車・からくり総揃え」に萩大山車も参加。記念DVDが製作され、そのワンシーンに「坂下ろし」が使われている。

「亀崎やほかにも知多地方には立派な山車祭りがあるのに、見る人が見ればすごいのかなあ」と当時、萩地区で話題になったとか。

万博参加の際に、ちようちんを新調したことがきっかけで、土曜日に宵祭りが行われるようになった。以前よりも祭りの雰囲気盛り上がりつつありますよ」と青木勇夫萩大山車保存会長は喜ぶ一方、お囃子をやってくれる子どもが減っています」と伝統的な囃子が今後継承できるかを心配する。

青木賢治さんは「子ども囃子」の指導にも熱を入れている。私もそうでしたけど、子ども時代の楽しい思い出は大人になっても残ります。町中の子どもたちに大山祇神社へ集まってもらい、常舞台で「お囃子コンサート」が開けたら」と夢を語り、「コンサートに出演してくれた子どもたちに「坂下ろし」を、お礼に披露します。最高のおみやげだと思えますよ」。さらに話は続いた。

次回は「宮津北組山車」を紹介いたします。